

私の住む大分市は当時、陸軍・海軍の基地があつたので戦争が長引くにつれ敵機の空爆が連日のようになり、学校内にも何箇所かの防空壕が掘られ避難訓練も度々あつた。防空壕といつても、無蓋（むがい）で簡単な構造であり弱い爆風を避けられるだけで強力な爆弾等では避難している者が全滅であつたらう。毎日防空頭巾の三角布を必ず携帯していた。その頃学校が爆撃に遭うことがあり、私の学校にも分散された児童たちが寄宿することになり益々大世帯となつていた。

一クラス八十名近くになり身動き出来ない程の教室内であつた（現在の一学級の二倍以上）

夜になると定まって七時頃から敵機来襲の情報注意報のサイレンが鳴り、各家庭とも電燈に黒い布を被せ

ラジオの情報に耳を傾けた。次に警戒警報、そしていよいよ敵機がこの上空に必ず来るといふ予想で空襲警報となり直に防空壕に入り様子を伺つていた。

毎日このパターンの明け暮れであつたが、時には壕に入る時間もない程のスピードで、爆弾の投下が始まり生きた気持がしなかつた。

その様な時は長い長い時間を感じられた。

家には大小幾つもの防空壕が掘つてあつてその時の状況で壕を選んで避難していった。

夜の爆撃は大体B29型という爆撃機でその高度が高く特徴のある鈍い金属製の轟音を出して飛んでいた。私達はその音を見分けることができ程何回も来襲して来た。

爆弾投下の翌日、知人の安否を気

遣つて現地へ足を運ぶと悲惨な姿となつてゐることがあつて本当に耐えられぬ気持であつた。また家屋は崩壊しているが人が無事であつた時は抱き合つて喜んだ。

昼間の空襲は、その頃太平洋上に敵艦が待機して、その艦上から飛び立つ艦載機という小型攻撃機で、ときには民家の屋根すれすれに飛んでいる時は乗員のアメリカ兵の姿がはつきり見え無気味であつた。小廻りがきく為正確な位置から目的を定め機関銃を乱射するので狙らいつけられたら殺されてしまう。

私も防空壕に入る間がなく物陰に避難していたが、低空飛行の艦載機による近所の人への残虐な光景を目にした事があつた。

主要鉄道の線路等も爆破されてい